

## 第15回、岡山芹沢文学読書会 内容報告書

■場所：倉敷市庄公民館

■日時：令和6年4月21日（日曜日）13時30分～15：30

■参加人数 8名

■筆記者：桑田幸真

= 読書会内容 =

- ・ 1986年4月29日に録音された、芹沢家での親様のお言葉を紹介。
- ・ 森次郎に真偽を確認するように依頼したり、天理教とは決別したと、書いてあるが、実証主義者の光治良先生は、まだ神の書を書くことをためらっておられるのだろうか。
- ・ 自殺について、子どもが自殺するということは、親に迷惑をかけたくなかったのではないか。
- ・ 現代において自殺する心情と70年前に自殺する心情は同じだと書いてあるが、やはり、親や周りの大人達の愛情のかけ方により、「自分は大事な存在だ」と気づくのではないか。
- ・ 富士山を親として毎日、会話をされていたのではないか。そういうところが先生の間人形成に影響を与えている。
- ・ 昔は、素晴らしい先生が多くおられた。光治良先生もこれによって助けられた。現代では、このような素晴らしい先生がなかなかいないのではないか。
- ・ うずわという魚は聞いたことがない。→これは方言で、丸そうだの事みたいだ。サバの仲間だと思う。
- ・ 学校の先生から高校へ行けと言われてたり、励まされたりして、それによって先生も頑張られている。やはり、うちの孫とは違うんだなと思った（笑）
- ・ 先生は、進学するという大きな大きな夢を持ち続けたが、やはりこれは神様が決められていた事ではないかと思った。

- ・親様は、天理教について、宗教のように狭い組織をつくることに反対で側近者たちが応法の道を選んで神道としての許可を得ようとすることに悲しまれ、二十五年の寿命をちぢめられて、存命のみきとして働くために、姿を消したと書いてあるが、この書は親神が世界全体を助けるための一助として書かれたものだと思う。
- ・現代は文化も発達し、豊かになったように見えるが、人の心には余裕がなくて、心が乾いているのではないか。
- ・三吉叔父さんに、お山はいろんなことを教えてくれるよ。と暖かい言葉をかけられている。親のいない先生にとっては嬉しかったと思う。
- ・友達の雑誌を焼かれて自殺しようとしたが、先生の配慮で、誤って川に落としたことにしてくれた。昔の先生は立派な人が多かった。
- ・日本は世界で一番のお金持ちの国と言われているが、自殺をする子どもの気持ちの変化にも気がつかない。このことを神は嘆かれている。この小説が書かれた当時より、状況は酷くなっているのではないか。
- ・神は光治良先生に大きな大きな試練とお仕込みがあった。これも、神の仕事をするためだったのだろう。
- ・私たち団塊の世代の子どもの時は、稲刈りや落ち葉拾いの仕事を親が残してくれていた。それも、子どもの気持ちを強くしたのではないか。
- ・現代は世の中を返る人物を育てようという先生が少ないのではないか。
- ・人間教育が本当に大切だと思う。私たちは親様の教えを学んでいるのでありがたいと思う
- ・現代人は本を読んだり、子どもの表情を見る余裕がないのではないか。暮らしは良くなったが、生活レベルを保つためにあくせく働いている。
- ・1985年から世界の大掃除が始まったが、世界の状況は良くなっているように見えない。→それは、ソ連崩壊（大掃除）が大きいと思う。これがなかったら、第三次世界大戦が確実に起きていたと思う。人間の心がお金お金になっている。これを変えないといけない。

以上